

大悲の根本

稲葉秀賢

エピクロスは

「自分が生きているあいだは死はなく、死んでしまえば自分はない。だから、死は自分とは関係がない」といったといわれる。たしかに理屈はそうであるが、それで私達は落ちつけるであろうか。

三木清は『人生論ノート』の中で、

「死は観念である」といった。死が経験の対象とならず、従って死は我々が観念し、想念するしか、それに触れる方法がないという点では、たしかに観念である。然し、死の想念は、観念である、想念であるとはいってられない強烈な迫力をもって、我々に生の態度の決定を迫るのである。従って死の想念をもたぬ人々は、真に生きることの意味など考えられない。

近代人は、ともすれば死の想念から逃げ腰である。それは死が一切の終末であると考えて、死の想念から逃げるからである。永生というような課題は現代人には全く無縁の如く感ぜられるのであろうか。然し、人間は誰でもが死を道伴れとしているのである。ただそれを自覚しただけである。自覚しないのは生の意味を問題とせぬからである。死を道伴れとするときにのみ、我々は真実に生きることができないであらうか。それ故に真実に死を問題

にすることは、同時に眞実に生を問題とすることである。

吉田松陰は、獄中であつて、

「死を求めもせず死を辞しもせず、獄に在ては獄で出来る事をする、獄を出ては出て出来る事をする。時は云はず、勢は云はず、出来る事をして行当れば、又獄になりと、首の座になりと、行く所に行く」

と書き送つてゐる。何という堂々たる生の態度であらうか。それは死によつて生を意義づけ、生死を超えてゆく堂々の道を説いたものである。然し誰でもかくの如き境地に落ちつけるのではない。愚凡の身にとつては、所詮それは觀念にしか過ぎない。却つて死の道伴れであることを自覚せず、従つて生の眞実の意義を忘れ、ただ「いかり、はらだち、そねみ、ねたむころ」の断えざる日常性から離れられぬところに、愚凡の姿がある。かくの如き愚凡の身に強く感ぜられるのが、

「超世無上に撰取し、選択五劫思惟して、光明寿命の誓願を、大悲の本としたまへり」
の『和讃』である。そこに大悲の本とおしえられた光明寿命の誓願の意味は如何に領解せられるであらうか。

二

宗祖は『教行信証』『証卷』に

「謹んで眞実証を顕さば、則ち是利他円満之妙位、無上涅槃之極果なり」

とあらわし、往相回向の心行によつて獲るところの証果が無上涅槃であるとあらわしていられる。蓋し涅槃は絶対の境地であつて、我々が眞実に落ちつける境地である。それは絶対の境地として、我々の帰すべき世界であると共に如来の本来的なる境地である。それ故に「証卷」では、滅度を転釈して、

「滅度に至れば即ち是れ常樂なり、常樂は即ち是れ畢竟寂滅なり、寂滅は即ち是れ無上涅槃なり、無上涅槃は即ち

是れ無為法身なり、無為法身は即ち是れ実相なり、実相は即ち是れ法性なり、法性は即ち是れ真如なり、真如は即ち是れ一如なり」

と云い、無上涅槃の極果としての真実証が絶対の境地であることをあらわしていられる。宗祖の転釈は徒らな語彙の羅列ではなくて、それによって無上涅槃の内容を明らかにせんとせられるのである。即ち常楽、寂滅、無為法身、実相、法性、真如、一如と転釈せられるところに無上涅槃の固定概念を排すると共に、それが一切の帰趣であると共に、そこから一切の存在が湧き出る如き根源であることを示すのである。それ故に、続いて、

「然れば弥陀如来は如より来生して、報応化種々の身を示現したもうなり」

と説かれるので、阿弥陀は実にこの一如から来生せられるのである。従って「真仏土巻」では、

「謹んで真仏土を按ずれば、仏は則ち是れ不可思議光如来なり、土は亦是れ無量光明土也、然れば則ち大悲の誓願に酬報するが故に、真の報仏土と曰うなり、既にして願います、即ち光明寿命の願是れ也」

と云って、光寿無量の願に酬報した不可思議光如来は一如より来生せるものであることを明かにしていられる。『唯信鈔文意』にも、

「法性法身とまうすは、いろもなしかたちもまします、しかればこゝろも及ばずことばもたえたり、この一如よりかたちをあらはして方便法身とまうす。その御すがたに法蔵比丘となりのりたまひて、不可思議の四十八願をおこしあらはしたまふなり、この誓願のなかに光明無量の本願寿命無量の弘誓を現はしたまへる御かたちを、世親菩薩は尽十方無碍光如来となづけたてまつりたまへり」

と説き給うた。

かくて仏身の体は一如の無上涅槃であり、その無上涅槃に相応して、如来それ自身を顕わすのが光寿無量の本願である。如来は無上涅槃を体とすることにおいて、光寿無量の本願を生起するのである。まことに本願の外に如来はな

いのであって、大悲の誓願に酬報するが故に阿弥陀なのである。それ故に阿弥陀は光明無量の故に阿弥陀と名づけ、寿命無量の故に阿弥陀と名づけるのである。まことに光明寿命の誓願こそ大悲の本なのである。ここに光寿無量の意味が明らかにせられねばならない。

三

曇鸞は「光明は智慧の相なり」と釈している。まことに光明は智慧である。然もその智慧は無上涅槃から出生する智慧である。涅槃からあらわれなければ、それは真実の智慧ではない。それ故にこそ、その智慧は無量といわれるので智慧の光に限りがないということは、その智慧が涅槃から生れたものだからである。然らばその涅槃は光明寿命の根源として如何に考えられるであろうか。

多くの転釈に於いて、涅槃寂靜は常に否定的に表現せられている。例えば「生もなく死もなく老もなく病もなく」という如くである。かくの如き否定的な表現は、凡ゆるものの空無を云うのではなくて、相対的な固執を否定する為である。生があれば死がある。生もなく死もなくということは、生死がなくなることではなくて、生死への相対的な固執がなくなるのである。われわれは生に固執するから死が恐怖の対象となるのである。生の固執がなくなれば死の恐怖もなくなるのである。常に首の座なりとも、死の座なりとも、行く所に行くということになるならば、それは涅槃寂靜である。そこに生死の相対的な固執がないからである。

かくて涅槃寂靜は相対性を離れた絶対の境地であって、生もなければ死もなく、老もなければ病もないという態で表現されるのである。そこに仏教の理想があらわされ、我々の帰趣する世界もまた涅槃寂靜である。浄土が無為涅槃界であると示されるのも当然である。即ち浄土は生死を超えた絶対の境地である。

かくて涅槃寂靜は我々の帰趣する帰結であると共に、そこから我々の生命が湧き出てくる根源であるといわねばな

らぬ。生死を超えた一如の世界からこそ、限りなき生命を出生するのである。それが如来である。その如来は光明無量壽命無量の誓願に酬報して出生するのである。

涅槃寂靜が我々の帰趣すべき絶対の境地であると共に、そこから我々の生命が出生する根源であるということは現実生活において具体的に如何なる意味を持つのであろうか。我々は現にここに生きている。生きているから必ず死なねばならない。然し死は常に我々の経験外にある。従つて死は想念せられるだけで、経験せられないから、確實に死を知ることとはできない。しかも知られないからといって捨てておけない迫力をもつて我々に対決を迫るのである。人は多くの場合、死の道伴れの話かけに耳をふさいでいる。然し耳をすまして暫くも離れないこの道伴れの話かけを聞くならば、そこに生のあり方が改めて問われることとなる。死を考へて始めて生の意味が明らかとなる。人は死の予告がないから幸せであるという。然し死の予告を受けないということは、果して幸せであらうか。一時はその予告によつて大地が崩れ去るような衝撃を受けるにしても、それに依て生の意義が明らかにせられるならば、その苦しみは百倍する幸せではないであらうか。まことに人間に死が与えられているのは、生の意味を見出す為である。いつでも死に随順し得るような生、それはもはや死に脅かされぬ生である。死に脅かされぬ生は、死を超えたものであり、死を超えているということは、生をも超えているのである。そして生と死とは却つて手をとりあつて、死は生の意味を見出さしめ、生はまた死の恵みを感じるといつた境地、そこに生死を超えた境地が生れる。それは生死がなくなつた境地ではない。却つて生死が厳然として対立しつゝ、それに固執しない絶対の境地なのである。その絶対の境地に立つて、始めて我々の生命が湧き出るといふことが感ぜられる。限りなき生命力は、生死一如の根源からこそ出生するのではないか。ここにこそ、眞実の生の態度がなければならぬ。ここに眞の生命力としての光明と壽命の意味が明らかにせられねばならない。

四

一般に光明無量ということは横に十方を照らすものであり、寿命無量は三世を貫くものであると説明せられている。即ち十方無辺の衆生を救い、三世を貫いて尽未来際の衆生を救う大悲を示すのが光明無量、寿命無量の本願であるとするのである。

たしかに光明無量ということは、無量光仏無辺光仏ともいわれる点から云えば、十方を尽す光に違いない。然し光明無量ということはそうした空間的意味で足るであろうか。殊に宗祖が無碍光仏とか、不可思議光仏という仏名を好んで用いられたことを顧慮する時、空間的領解が超日月光仏といわれる真実の意味を、見失わしめる恐れなしはない。それ故に、光明無量ということは、影のない光であるといったら、空間的領解を超えて、無碍光的な意味がよりよくあらわされるのではないであろうか。蓋し日月の光は、それが強ければ強い程、却って暗い影を持つ。それ故に日月の光は決して無碍であることはできない。無碍であることは空間を超えている。空間を超えるということは影のない光とあらわす外はない。例えば、明かるい人間、罪のない人間を影のない人といい、罪を負い、悩みを抱く人を指して、暗い影を持つ人という。如来は限りなく明かるいことに於いて、老少善悪をえらばないのである。老少善悪を選ぶ如き差別の影を持たぬのである。光明が智慧のかたちであるという点からすれば、影のない光明は知らざることのない智慧である。一切を洩らさぬ大悲の智慧である。されば光明無量ということは、空間的に十方を尽すというよりは、影なき光として一切無碍の大悲摂化を示すのではないであろうか。そこに光明無量の願が大悲の根本とせられる所以も明らかとなるのである。

之に対し寿命無量は時間的に尽未来際を尽すことには違いないけれども、影のない光に対すれば、過ぎ去ることのない時間を示すものでないであろうか。我々が尽未来際といって、三世を考える場合には、過去が現在から未来へ延

びてゆく時間の無限性を意味している。そうした無限性が寿命無量ではなくて、現在に於いて限りなき過去と未来を内感する無限性である。永遠の今ということがよく云われるが、永遠の今に於いて感ぜられる生命が寿命無量でなくてはならない。従って無量寿如来は、ただ寿命の長い如来ということではなくて、今現在しつづ、無限の過去と未来を包む生命であつて、そこに寿命が慈悲と云われる所以がある。そして如来の慈悲は無縁の大悲と表現せられるところに、永遠の過去と未来を包んで、一切を摂取して捨てぬ大悲があらわされている。無量寿如来に於いて、始めて如来の究極的自覚があらわされ、そこから無限の生命が流れ出るのである。さればこそ、寿命無量の誓願が大悲の根本と云われるのである。

かくの如く光明無量、寿命無量の本願は、一如の涅槃界を背景として現われ、そこに大悲の本が示されたのである。そして光明寿命の本願が大悲の本であるということは、阿弥陀仏が光明無量寿命無量の誓願に酬報した真報身であらわされるところに、いよいよその意味が明瞭に示されるのである。

阿弥陀の名義に就いては『大経』には無量覚といい、特に光明の徳をあらわすに十二光仏の名を以てし、『阿弥陀経』には「彼の仏の光明は無量にして十方の国を照すに障礙する所なし乃至、彼仏の寿命及び其の人民も無量無辺阿僧祇劫なり、故に阿弥陀と名く」と説かれている。蓋し光明と寿命は常に仏徳を称える義であつて、寿命無量を以て所証の理、光明無量を以て能証の智慧とし、或は寿命無量を仏の内証、光明無量を以てその外用とし、然も所証の理と能証の智慧、内証と外用とは離れないものであるから、時には能証の智慧に所証の理を摂し、又時には所証の理に能証の智慧を摂めて、その關係を示すのである。

然るに光寿無量は既に『阿弥陀経』にも説けるが如く、それは阿弥陀の名義であつて、阿弥陀の説明ではない。ここに光寿無量の意味が更に深く考えられねばならない。

宗祖は光明無量と寿命無量の願について「然れば大悲の誓願に酬報するが故に、真の報仏土と曰うなり、既にして願有ます、即ち光明寿命之願是れなり」といって、不可思議光如来は光寿無量の願に酬報した仏であることをあらわし、その場合、光明寿命の願といつて寿命無量を光明無量に摂めていられるが如くである。それは既に仏を不可思議光如来と呼ばれたことにもあらわれている。

蓋し宗祖が真仏を不可思議光如来とせられたのは、遠く『大無量寿経』に基づくのであって、『大経』では「無量寿仏を無量光仏乃至超日月光仏と名づけたてまつる」といって、寿命の徳を光明の徳に摂め、光明の徳用を明す十二光の中に、寿命無量の意味を示していられる。それ故に宗祖は『正信偈』に、

「善く無量無辺光乃至超日月光を放つて塵刹を照す」と讃嘆していられる。そして寿命の徳が光明の徳に摂せられることは、遠く七祖の解釈に伝統せられたところである。即ち龍樹は既に無量光明慧の名を以て弥陀に名づけ、世親は尽十方無碍光如来の名を以てし、曇鸞は不可思議光仏と讃えている。更に『観経』を所釈の経とする善導にあつても「光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨」の文を以て常に弥陀の名義をあらわし、光明名号を以て十方を摂化すと教えられている。

かくの如く寿命無量の徳が光明無量の徳に帰せられるのは、光明が智慧の相として、大悲の摂化をあらわし、寿命無量といつても、この大悲の摂化が永遠の過去と未来を孕んで現在することをあらわすに外ならぬからである。古来光明を智慧とするに對し、寿命は慈悲の徳を示すものとせられている。然るに宗祖の聖教の上にも、寿命を慈悲と積する証文は直ちに見出すことができないのは、寿命を却つて光明の徳に摂して、その大悲摂化が常に現在するところに寿命無量の徳を感知せられたからではないであろうか。それ故に、『浄土和讃』には「慈光はるかにかふらしめ」

といいその左訓には、

「あわれむひかり、しはちちのしひにたとふなり」

とあって、慈悲を光明であらわし、それが「はるかにかふらしめ」と、大悲摂化の現在することを讃えていられる。それ故に、

「ひかりのいたるところには、法喜をうとぞのべたまふ」

と示されるのである。従って宗祖が「光明寿命之願是也」といって、二願を一願名の如く表現せられたのは、寿命無量の願といつても、光明無量の願の外に別の体があるのではなくて、影のない光が永遠の過去と未来を孕んで現在する摂化の相をあらわすものに外ならない。まことに光明無量ということは、影のない光をあらわすのであって、日月の光が必ず影をもつのに比せられて、超日月光と示されるのである。蓋し光に影があるということは、その光が真に闇を照破することができないからであって、真に闇を破る光は影のない光、光そのものでなければならぬ。その意味において、如来の光明は能く衆生一切の無明の闇を破るのである。如何なる罪もさわりとならぬのである。弥陀の本願をさまたぐるほどの悪のない所以である。そこに光明無量寿命無量ということが大悲の本と云われるのであって、要するに光寿無量は大悲摂化の徳を示すものと領解せられるのである。

宗祖が曇鸞の『讚阿弥陀仏偈』によって「讚阿弥陀仏偈和讚」四十八首を製作せられたのは、十二光仏を憶念して、光明そのものもつ大悲摂化の意味を顕わすと共に、それに対治せられる業障との関係を明らかにせられたものである。例えば、

「解脱の光輪きはもなし、光触かふるものはみな、有無をはなるとのべたまふ、平等覚に帰命せよ」

とあって、無辺光が有無の見を破することを示し、「解脱の光輪」の左訓には、

「われらかあくこふほむなうをあみたのおむひかりにてくたくといふこゝろなり」

と釈していられる。或は清浄光仏が一切の業繫を除くとか、また無対光仏が業垢を除くとか、或は光炎王仏が三塗の黒闇を開くとか、説かれることは、それに依て大悲摂化の具体的な相を説かれると共に、それに依て光明無量の徳が如何なるものであるかを明瞭に示すものである。然もそれらの業障を対治する光明の徳をあらわすのに、無量光を智慧の光明といい、無辺光を解脱の光輪といい、無対光を清浄光明というなど、弥陀の徳用が円融無碍であつて、それが影なき光として透徹することをあらわすものである。いま十二光仏の一々について、その意味を明らかにする暇はないけれども、ただ特に注意しておかねばならぬことは、宗祖が無碍光仏を十二光仏の本とせられたことである。

「ひとびとのおほせられてさふらふ十二光仏の御ことのやうかきしるしてくださいませさふらふ。くはしくかきまいらせさふらふべきやうもさふらはず、をろをろかきしるしてさふらふ。詮ずるところは無碍光仏とまふしまいらせさふらふことを本とせさせたまふべくさふらふ。無碍光仏はよろづのものゝあさましきわるきことにさはりなくたすけさせたまはん料に、無碍光仏とまふすとしらせたまふべくさふらふ」(御消息集^{廿六}左)

という御消息は明らかに無碍光仏を十二光仏の本とすべきことを教えていられる。凡そ十二光仏の關係については香月院の六科の説が広く行われて来たのであるが、それに依ると無量・無辺・無碍の三光は体徳、無対・炎王の二光は對他頭勝の徳、清浄・歡喜・智慧の三光は化他滅惡の徳、不断光は常恒不断の徳、難思・無称の二光は難思議の徳、超日月光は超日月の徳とせられている。従つて無対光以下は寧ろ徳用を示すのであるから、用を体に帰すれば、無量・無辺・無碍の三光に摂るのである。然も無量・無辺の二光は無碍光に極るのであつて、そこに宗祖が特に無碍光仏を十二光仏の本とせられた所以がある。特にこの消息にあつて、

「無碍光仏はよろづのものゝあさましきわるきことにさはりなくたすけさせたまはん料に」

とあるように、無碍は衆生の煩惱惡業に障えられぬ意であつて、そこに極りなき大悲摂化のはたらきを仰ぎ、ここにこの光寿無量の願を大悲の本と感銘せられたのである。

最後に注意しなければならぬことは、光明無量寿命無量の誓願に酬報したのが、弥陀の真報身であるということである。宗祖は「真仏土卷」に、

「然れば大悲の誓願に酬報するが故に眞の報仏土という」

といつていられる。まことに弥陀は無色無形の法身仏でもなく、また有色有形の応身仏でもない。光明無量、寿命無量の真報身である。ここに光寿無量の真報身ということは如何なる意味であろうか。宗祖は『唯信鈔文意』に、

「仏について二種の法身まします、ひとつには法性法身とまふす、ふたつには方便法身とまふす、法性法身とまふすはいろもなし、かたちもまします、しかればこゝろもおよばず、ことばもたえたり、この一如よりかたちをあらはして方便法身とまふす、その御すがたに法蔵比丘となりのたまひて、不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはしたまふなり、この誓願のなかに、光明無量の本願、寿命無量の弘誓をあらはしたまへる御かたちを、世親菩薩は尽十方無碍光如来となづけたまつりたまへり、この如来すなはち誓願の業因にむくひたまひて報身如来とまふすなり、すなはち阿弥陀如来とまふすなり、報といふはたねにむくひたるゆへなり、この報身より応化等の無量無数の身をあらはして、微塵世界に無碍の智慧光をはなたしめたまふゆへに尽十方無碍光仏とまふす、ひかりの御かたちにていろいろまします、かたちもまします、法性法身におなじくして無明のやみをはらひ、悪業にさへられず、このゆへに無碍光とまふすなり、無碍は有情の悪業煩惱にさへられずとなり、しかれば阿弥陀仏は光明なり、光明は智慧のかたちなりとすべし」

といつていられる。ここに「法性法身とまふすはいろもなし、かたちもまします」とあるからそれは色形以前のものである。そこでは無色の色、無形の形を想念してはならない。それこそ真如であり、一如である。その法性法身

からかたちをあらわしたのが方便法身である。そしてその方便法身は、光明無量、寿命無量の本願に報いあらわれたものである。光寿無量の願に酬いあらわれたのであるから尽十方無碍光如来であり、阿弥陀如来なのである。報という意味はたねにむくいるという意味で光明無量たらん、寿命無量たらんという本願のたねに報いて、阿弥陀仏とならせられたのである。従って阿弥陀仏が報身仏であるということは、光寿無量に依てあらわされた大悲摂化の徳をあらわすものに外ならない。従って尽十方無碍光如来は、ひかりのかたちであつて、色もなく、形もないのである。それは無明の闇を払い、悪業に障えられぬ智慧のはたらきに外ならぬのである。それ故に阿弥陀仏が報身仏であるということは、それが光明寿命の誓願に酬報したという意味に於いて、摂化自在のかたちを示すものと云わねばならぬ。摂化自在のはたらきのたねである光明寿命の誓願こそまことに大悲の本と云わねばならない。

かくて弥陀はこの大悲摂化のはたらきにおいて、十方衆生の救済を誓われたのであり、その願心をあらわすのが第十八願である。従つて、大悲摂化の根本たる光明寿命の誓願に酬いあらわれた弥陀であるということは、十方衆生の救済を誓われた第十八願酬報の弥陀であることができる。

かくて光明寿命の誓願は、十方衆生が念仏往生の願に応じて、至心に信樂し、我が国に生れんと欲うて乃至十念するとき、その願が眞実に成就するのである。十方の衆生若し生れずば正覺を取らじという大悲摂化の願が成就した時、光明無量ならん寿命無量ならんという、大悲摂化の願が成就し、阿弥陀仏は酬因の身となり給うのである。夙に善導大師は『玄義分』一八右に、

「法蔵比丘世饒王仏の所に在して、菩薩の行を行じたまひし時、四十八願を發して、一々の願に言く、若し我仏を得むに、十方の衆生我が名号を稱して、我國に生れむと願ぜん、下十念に至るまで若し生れずば正覺を取らじ、今既に成仏したまへり、是酬因之身也」

といつていられる。念仏往生の願が成就して、十方の衆生が念仏しつつ、光寿無量の如来の大悲摂化を仰ぐとき、

光寿無量の願が真に成就するのである。まことに阿弥陀仏は光寿無量の願に酬報した真の報身仏といわねばならぬ。かくて光寿無量の願に酬報した身なればこそ、阿弥陀仏はひかりのかたち、智慧の相に外ならぬのであって、光寿無量こそ大悲の根本ということが領解せられるのである。もと光寿無量の願は摂法身の願と云わるる如く、如来自身が光寿無量ならんと誓われた自利の本願であるが如く思惟される。然しその自利成就はそのまま利他成就であって、光寿無量の本願は大悲摂化の無碍なるはたらきをあらわす慈悲門に外ならない。即ち光明無量なることに於いて、影なき光が一切に透徹するが如く、限りなき智慧において十方を摂取し、又寿命無量なることにおいて、現在に永遠の過去と未来を孕んで十方の衆生を包み、そこに限りなき如来の大悲を顕示せられたのである。かくの如き慈悲極りなき大悲の名が南無阿弥陀仏であって、この南無阿弥陀仏において、十方衆生を大悲の願心に帰せしめ、そこに光寿無量の慈悲門を成就せられるのである。ここに光明寿命の誓願を大悲の本とする根本的意趣を知るべきである。

は かり な き 光

光はかりなきが故に阿弥陀とよぶ。量りなき光はものに碍えられるということがない。その無碍の徳を、われらは念仏に於て感知せしめられる。故に「念仏者は無礙の一道」である。

仏を觀ようとすれば、仏を離れる憾みがある。名を称うれば、仏は常にわれらに來り給う。仏はその無碍の光を名の上に現わされるからである。

されば光明はかりなしというも、仏身の上に觀うることでない。ただ念仏に於て感知せしめられるものである。洵に遍照の光明も、念仏するものを摸め取りたまいて、阿弥陀とならせるのである。

(金子大栄著「口語訳教行信証」領解より)